
彼と彼女のBGM

abc

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女のBGM

【Nコード】

N8907J

【作者名】

abc

【あらすじ】

世界中の街、どこに行っても人の傍で音楽は流れている。i-podをポケットに入れてイヤホンから。おしゃれなバーで。ライブハウスで。一人の部屋でラジオをかけて。テレビから。ふいに懐かしい歌を口ずさんで。心の中で。どんな人にも語られるべきストーリーと、そのストーリーの傍で流れているBGMがある。様々な人のストーリーと、そのストーリーに寄り添うように流れるBGMを短編の小説にして切り取り、連載していきたいと思います。

#1 フジファブリック

絵を描いている。油の絵の具をキャンバスに塗りたくる。焦げ茶のテーブルの上に、ひとつだけ置かれている真っ赤なりんご。僕はりんごの絵を描いている。

僕は人とうまく話をする事ができない。頭の中で話したい言葉のアイデアが浮かんでも、そのアイデアは頭の中で空を切る。やっとのことで言葉が口から出ても、舌が回らず、言葉は言葉にならずに音として空を切る。僕みたいな人のことを吃音というらしい。

僕が僕のことを覚えている時から、僕はずっとそうだった。でも、少ない友達と一緒に、楽しく毎日を過ごしてきた。周りの人から馬鹿にされることに、少しだけ怯えていたけれども。

ペーパーの試験はなぜだか自分でも不思議な程によくできる。そのおかげで、僕は世間では一流と呼ばれている大学に入学することができた。

だけど、僕は絵のことが忘れられなかった。大学を卒業した後は、バイトでお金を稼ぎながら、いつか個展を開くことを夢見て、こうして絵を描いている。あ、少し訂正する。大学を卒業して3年経った今、バイトが見つからなくて困っている。だから、昼はバイトの面接と面接のアポ取り、夜は絵の勉強というのが今の僕の生活だ。いつまでも親元でパラサイトしている訳にはいかないしなあ、どうしたものか。

小さい頃から絵は得意だった。美術の成績は5段階評価でいつも5。絵を描いている時はモチーフとモチーフの周りの景色のことを考え

ているだけでいい。後は自分が抱えているモヤモヤを吐き出すように描くだけ。それで美しい絵が描けたら、とびつきり嬉しい。

僕が何か物事に没頭できるのは、絵を描いている間だけだ。絵を描いている時は他のことを考えないで済む。世の中のこと、自分の将来のこと、本当は何も考えたくない。

言葉ではいつも伝えられないし、伝わらない。言葉で伝えようとすることには、勇気がいる。その勇気は僕にはない。それに、言葉で伝えられることなんて、限られているだろう。だから、僕は絵を描いている。

否定されることが怖い。他人から「それは違う、間違っている」と言われるのが怖い。だから、僕はキャンバスの上、油の絵の具を何重にも塗り重ねる。

僕の心は臆病だな。僕の心は臆病だな。誰か、僕の心を見て。見て。僕の心を、見て。

(BGM) バウムクーヘン / フジファブリック

ある晩のこと、唐突に、僕の父親が「あのさ」と言って、テレビに向いていた僕の視線を父親に向けさせた。僕の父親は、「今日、マンションの管理組合の会議が終わった後、聞いた話なんだけどさ」と前置きをした上で、僕が驚くことを話し始めた。

「5階の 号室に住んでいる女子高生、5階から飛び降りたらしいよ。幸い、軽い骨折だけで済んだみたいだけど。事情に詳しい人によると、自殺を図ったんじゃないかって」

いつもよりも少しだけ低めのトーンで父親は言う。

5階に住むその子とは、エレベーターで何度か会釈を交わしたことがある。彼女はそこまで追い詰められていたのか。

彼女が飛び降りるまでに、何か僕にできたことはなかったのだろうか。

しばらく考えたけれども、僕にできたことは何もなかった。考えること自体が馬鹿なことなのかもしれない。でも、なんだか僕は悲しかった。骨折で済んで良かった。そう思った。

昨日。気持ち良く晴れた日曜日。僕は公園で、持ってきた椅子に座り、公園の景色をスケッチしていた。時間はゆっくりと過ぎ去り、いつのまにか日が沈み始めた。スケッチが完成しかけた頃、夕方5時のチャイムが鳴った。

突然、斜め後方から声がした。

「素敵なスケッチですね」

僕が後ろを振り向くと初老の女性が立っていた。かわいらしい日傘をさして、すくつとその女性は立っていた。

「この木のたたずまい、そのすべり台の感じ、私、好きです」

ずいぶん変わった人だなと思った。そんなことを言われて、少し恥ずかしくなった。

でも、嬉しかった。他人に自分の絵を褒めてもらうのは、学校の先

生と友人を除いて初めてかもしれない。

「あ、あ、あ、あり、がとう、ご、ござい、ます」

嬉しさのせいで、余計にどもってしまった。公園から家に帰るまでの間、僕の頭の中は嬉しさと恥ずかしさが終わらないいたちごっこを繰り返していた。

(BGM) 若者のすべて / フジファブリック

今日。今日も気持ち良く晴れている。

昼に電話があった。清掃の仕事が決まった。これでしばらくはお金を稼げるぞ。喜ぶ、というよりも、まず先に僕は安心した。

安心して、僕は昨日とは別の絵の続きを描き始めた。

夕方5時のチャイムが鳴る。

僕は絵を描いている。油の絵の具をキャンバスに塗りたくる。僕はりんごの絵を描いている。真っ赤な、真っ赤なりんごの絵を描いている。生きている。生きているんだ。生きているんだ。生きているんだ。生きているんだ。僕は生きているんだ。

(BGM) 茜色の夕日 / フジファブリック

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8907j/>

彼と彼女のBGM

2010年10月9日22時13分発行